

きりふ湿原トラスト

この湿原をこどもたちへ



2009年11月

No.84

い・る・ど・り 岬を巡る海鳥たち「ケイマフリ」

「チィチィチィ」海から甲高い声をする。姿を捜すと細身の黒い鳥が2羽浮いている。鳴きあい追いかけあい、飛んでは高く低くジェットコースターのように上下する。これがアイヌ語の「赤い足」から名がついたケイマフリの求愛飛行。派手なエトピリカに比べると地味な衣装だが、この仲間では珍しく大きな鳴き声が特徴だ。

私がエトピリカを待つ岬ではケイマフリも見ることができる。この両種は同じ仲間でありながら生活パターンが違うのが面白い。例えば、エトピリカは外洋性で沖合いに行き来する。一方ケイマフリは沿岸性なので島の周りで過ごす。片や土に穴を掘り巣とし、片や岩の亀裂を巣とす。片や海上で交尾し、片や岩礁上で交尾す。片や海上での求愛ダンスがあるが、ケイマフリには飛行しかない。そこでこの大きな声が重要な意味をもっているらしい。集団になるほど2羽で鳴き合うシーンが多くなってくるのだ。きっと「私達、夫婦ですよ」と宣言している表現に違いない。

じつは、ケイマフリは世界的には珍しい種で極東にしか生息していない。北海道では五百羽ぐらいと危険な状態で、霧多布の小島でも一時5羽までに減ってしまった。それが今年には19羽集まり3つがい繁殖と回復の兆しがでてきた。その要因は、エトピリカのデコイに同じ仲間がいると集まってきた可能性が高い。目的とは違う効果だが、それはそれで何よりだと思う。



ケイマフリの夫婦

文・写真：片岡 義廣
民宿えとぴりか村を営む。国設鳥獣保護区管理員。著書「エトピリカ」

浜中の文化遺産 第19回 ～ 昆布漁と道具 ～

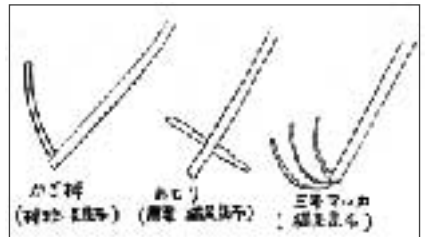
漁師さんと話をしていたら、「昔は山から木を山で切ってきて、昆布の棹にしたんだよな」という話がありました。それを聞いて浜中町で昔から行われている昆布漁の道具に注目しました。

昆布漁で使っている道具は採る昆布によって違います。棹まえ昆布や長昆布は、カギ棹と呼ばれる棹で昆布をすくって抜いて採ります。カギ棹は、昔はトドマツの木に穴をあけてオンコやナラの木を削ったものを入れてくさびで打ってとめて作りしました。カギの形は今も昔も変わりません。「木の形がちょうどカギになっていたらそのまま棹として使ったよ」と漁師さんは話してくれました。

お盆を過ぎると長昆布が枯れて少なくなり、丈が短くなってカギ棹にひっかからなくなるので、ネジリという道具に変わります。ネジリ棒の先にカンザシと呼ばれる50cmくらいの棒をさして、昆布を棹にからめてねじって巻き取ります。ねじる時に持つ手はウダと呼ばれています。

春と秋に昆布が波で寄って海底のくぼみに溜まったものをすくい採る漁を春は子別れ漁、秋は沈み昆布漁といって三本マッカという道具で採ります。採る昆布の種類は主に猫足昆布です。

今は漁協で道具を買うそうですが、昔は皆、道具は木で作っていたと聞いて、先人の知恵を学んだひと時でした。(美奈)



はまなかグルメ 第19品 鮭と昆布の卵焼き

レシピ提供
「こなな」
加藤千恵子さん



お弁当に定番の卵焼きですが、ちょっと一工夫すると、立派な夕飯のおかずの一品になります。

今回は、鮭の缶詰と昆布。鮭の缶詰に程よい味がついていて、昆布と一緒に卵で巻くと、とっても美味しいのです。

見栄えも良くて美味しい、一工夫卵焼きをぜひお試しください。(美奈)



材 卵
鮭の缶詰
昆布

作り方

昆布はもどして卵で巻けるサイズに切っておく。
卵は割って溶いておく。
フライパンに油をしいて、卵を流し、鮭と昆布をのせて巻いていく。